

**「職業としての学問」 マックス・ウェーバー著 尾高 邦雄訳 岩波書店 1980年11月
発行**

人間誰も自分の専門くらいは勉強するもので、それ以前の生真面目さを測る一つの指標として大学編入試の面接で読書傾向を質問されることがある。読書傾向で何点と内点化されていることはないだろうが、ライトノベルやミステリーしか挙がらないようだと心証が大きく削られる。大学教員が考える、学部に関係なく大学生が学部時代に読んでおいて欲しい社会科学系の基本文献がいくつかある。高校生が高校で読まされる本は大抵が小説などの文芸作品で、大学に入ってからこれらの社会科学系の基礎文献(の翻訳)に接する。高専から大学へ編入学するとすっぱり抜け落ちてしまいがちな領域だ。そのような読書経歴を最低1冊持ってほしい。

お薦めするのはまずはマックス・ウェーバー『職業としての学問』だ。マックス・ウェーバーは「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」などで著名な20世紀初頭ドイツの社会学者で、本書はウェーバーが大学生に向けて行なった講演の記録である。ウェーバーはまず、学者を志す者が、将来教授などのポストを得られるかどうかは、そのほとんどが、その人の研究成果ではなく、運や偶然で決まってしまう、また、運よく大学教員になれたとしても、研究者としての評価と教育者としての評価は別物と、アカデミックな職業人生に伴う現実的な問題を明らかにして学生が抱く幻想を打ち砕く。

ついでウェーバーは、学問にできることと学問にはできないことについて説明し、学問をすることの意味に対して疑問を問いかける。元が講演なのでわかりやすくかつ短い。

大学編入学を目指す学生には一読をお薦めする。